わだつみの声は
わが胸に

どくしんふじんれんめい編

若樹書房刊

廃検
止印

わだつみの声は　わが胸に

¥ 480

昭和43年12月1日第一刷発行
昭和43年12月10日第二刷発行
昭和44年1月25日第四刷発行

編　者　どくしんふじん連盟
発行者　安　倍　玲　以
印刷者　町　田　幹　雄

発行所　若　樹　書　房

東京都目黒区下目黒3—24—14
目黒コーポラス 209
TEL 711—5019(代)振替 26018
太平印刷・美成社製本

もくじ

もくじ

わたしと私の世代の履歴書

若き日は戦争と共に　佐々木晴子……五
従軍看護日記　川崎フサヱ……一三

青春

陸軍偕行社　大谷美江子……二一
思いを短歌に託して　山本八重子……三三
慰問文の君　堤　たかこ……三八
お見合いの相手と壕へ　三浦喜久子……四七

女学生も工場に

風船爆弾に学力を奪われて　武井京子……五九
女の戦争責任　由良サダ子……六四
十五歳の1945年　岡本香代子……六六

私のなかの教育勅語　杉山てる……六九
軍国乙女　長谷川良子……七一

利敵行為と疑われ
独房に監禁される　笠原徳……七七
流言蜚語罪　堤照……八一

飢え
お腹が空いてすいて　青木君子……八七
苦しくつらい日々　渡辺真江……九〇
みんなが蛇を食べた　山下すみれ……九一

少国民
空襲の合い間に卒業式　宮川あき子……九七
御真影　薦田吉兄……九九
沖縄から疎開児童を迎えて　末野アヤ……一〇一
千人針と『建国三千年』　鈴木節子……一〇三

もくじ

空襲

水戸方面へ艦砲射撃　堀口泰子…一〇九
東京大空襲　渡辺政子…一一一
京浜工業地帯の空襲　今井悦子…一一三
直撃でわが家は跡形もなく　成瀬峰子…一一六
移転先で再度の空襲　花丘志乃…一二〇
呉から見た広島の空　松田尚子…一二三
ヒロシマ　沢村美知子…一二三
空から油と焼夷弾　松本義子…一二三

外地

イール・ピンアン　一路平安　大久保光子…一三七
引き揚げの苦闘　坂井ミヤ…一四三
満洲での集団疎開　小林恵子…一五〇
青天白日旗を作らせられた戦後―台北―　花松郁子…一五三
京城で迎えた敗戦　田上かほる…一六二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マニラで捕虜に　染宮恒子…一六五

戦中・戦後わが生活

七転び八起き　関田多可子…一七一

転々　庄　静子…一七八

虚脱　小林小枝…一七九

疎開　原田寿美恵…一八一

戦争の爪跡　田中昭子…一八三

看護婦を天職と信じて　葛城悠子…一八五

江戸っ子三代目の流転　太田陽子…一八九

母の涙の青豆　北大路綾…一九一

米兵からDDT消毒　佐藤佳苗…一九四

無知に気付く　飯塚洪子…一九五

陸軍航空技術研究所　元村かずえ…一九八

独り暮らし

わが道を求めて歩む　江藤博子…二〇五

もくじ

「お嬢さん」から職業婦人へ　伊藤新子…二〇九
米軍基地に職を求めて　山屋光子…二一四
教師を選んで　高尾ひろ子…二一八
仕事に情熱をもって　岡本晴子…二二〇
逃げないものを身につけたい　坂野はる…二二一
民主化と封建制にはさまれて　高原美代子…二二六
孤独の不安　馬場たか子…二二八
経済的には困らなくても　上村敏子…二三一
未婚の多い私のクラス　松井ユミ子…二三二
骨にしみる淋しさ　塩田サチ子…二三三
独身女性の解放　林知子…二三五
心配な老後　中山美保子…二四〇
ひとり暮らしの不便　薄場よし子…二四二
現状を憂える　小山由記子…二四三
性の解放について　小田明子…二四四
伯父と軍歌を支えとして　佐々木さとい…二四九

仏様と対話　滝本清子…二五一
「独婦連」入会の動機　小野いち…二五二
合唱団とともに　熱田政子…二五三
独身三人姉妹　和気丸子…二五五
—旅—安らぎを求める　井口和子…二五八
あとがき　大久保さわ子…二五九

わだつみの声はわが胸に

どくしんふじんれんめい編

若樹書房刊

わたしと私の世代の履歴書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

若き日は戦争と共に

佐々木晴子
宮城県

新聞の小さなコラムで独身婦人連盟のある事を知りました。
三十年間同封略歴のように、ただ働きつづける毎日ですが、
ささやかな技能が大きなささえになって今日まで生きてまいりました。
細くながくつづく道でした。

一九三三年　旧制高等女学校卒
昭和八年　四月　タイピスト養成所入所
十七歳　英・和文タイプ習得

一九三五年　宮城県文書課にタイピストとして勤務
昭和十年　七月頃より日華事変の出征家族への軍事扶助の指令のタイプに忙殺される
十九歳　しばしば夜間呼び出しを受け勤務に従事
十月　長兄中支に出征、親しい人達もつぎつぎと応召した

一九三九年　五月　北満三江省佳木斯市の関東軍補給廠に勤務、張鼓峰ノモンハンの国境紛争事件がつづき従軍タイピストとして補給業務多忙をきわめた
昭和十四年　部隊唯一の女性として零下三十四度の冬を過ごす。荒涼とした東満国境の新興都市だった
二十三歳　七月　中支那派遣軍に転出
上海特務機関渉外部に勤務

一九四〇年
昭和十五年
二十四歳

ナチに追われたユダヤ難民が大量に上海に上陸、涉外部はユダヤ難民問題の書類のタイプに忙殺された
治安、衛生状況悪くテロ横行
九月　同僚のタイピスト赤痢に罹り戦病死
十月　江蘇省前線に親しい友人を慰問に行く
十一月　南京に出向
興亜院華中連絡部南京駐在員として勤務

一九四一年

一月　元日から出勤、軍顧問部からの依頼を受け極秘書類を終日打つ
五月　国民政府樹立、還都式典
南京は慶祝一色につつまれる
慶祝のため内地からの知名人の往来はげしく、その都度声明文など打たされる
この年に次兄南支那に出征
十二月八日　太平洋戦争起こる

昭和十六年 二十五歳	この年の六月に母逝く 南京の戦跡をたずね明孝陵や中山陵と南京の休日は史蹟見学に暮れた 九月　弟が北満に応召、音信跡絶える
一九四二年 昭和十七年 二十六歳	四月　アメリカ機はじめて東京に来襲 蔣介石、重慶に政府を樹立 十月　大東亜省新設
一九四三年 昭和十八年 二十七歳	五月　アッツ島玉砕 十月　学徒戦時動員体制発表される 十二月　学徒出陣す。徴兵適令一年引下げ
一九四四年 昭和十九年 二十八歳	五月　日本へ帰国して父と姉の三人で留守を守る 八月　兄弟出征してしまった留守宅に東京からの学童疎開を受け入れる（六年男子五十五名） 家つき保母として、なれない仕事に奮戦する。食事の世話

一九四五年
昭和二十年
二十九歳

洗濯、買い出しと際限なく仕事が続いた
食糧不足は深刻になってきた

三月五日　中学進学のために帰京する学童を見送る
帰京直後の三月十日は東京大空襲、全員無事の報に安堵
四月　強制疎開の第二陣として三年生が疎開して来た。六年生に比べ泣き虫が多く東京に帰りたい一心から脱走者が出る。幸い駅員の協力で無事に連れ戻す
集団生活のためシラミの発生はなはだしくシラミ退治の時間を設けたり、吹出物の治療にあたる
たき木ひろい、重いリュックを背負って買い出しの毎日
五月七日　ドイツ無条件降伏
七月二六日　ポツダム宣言発表
八月六日に広島、九日長崎に新型爆弾
八月十五日終戦
東京に帰れると歓声をあげる子供たちを前に平和の明日への不安は強かった。一体みんながどんな風になるかと思っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com